

日本古典文学における「海」・「海辺」・「海外」 ——古事記神話・源氏物語・大航海時代前後の作品をめぐって——

久富木原 玲

はじめに

「海」「海辺」「海外」は、日本の古典文学の中で、どのように描かれているのであろうか。日本列島は海に囲まれているにもかかわらず、「海の文学」と呼べるような作品は、意外に少ないように思われる。本稿では、古代から近世までの作品を概観して、日本人が「海・海辺・海外」をどのようにとらえ、描いたのかということについて考える。

【I】「海へ向かって漕ぎ出す」日本古典文学——神話から近世まで

古代神話から近世に至るまで、海に向かって漕ぎ出す作品を思いつくままに挙げてみよう。以下に簡条書きで示すように非常に少ない。実際には、さまざまところで海を行き来していたにもかかわらず、それが文学化される機会は、あまりにも少なかったということであろう。近世（江戸時代）の鎖国政策などの影響もあるだろうが、海へ乗り出して行くことは日本の古典文学の題材として、それほど興味を持たれなかったということになろうか。周りを海に囲まれた日本列島であるから、海に漕ぎ出して行く発想やそれを基にした伝承・文学作品がもっと多く見られてもいいように思われるが、日本では古来、こちらから漕ぎ出して行くよりも、海の向こうからやって来て、宝物がもたらされたり、国土創成に力を貸したりするという発想が根強くあったようだ。

(1) 古代

①神功皇后の新羅遠征（記紀神話）※神武天皇の東征などもある。

・九州

- ・皇后の皇子は海上を流浪(後の応神天皇。瀬戸内海から和歌山沖まで)。
- ・朝鮮半島との緊張関係——古代から近現代まで。

②竹取物語

かぐや姫に求婚する貴公子たちのうち、大伴の大納言、自ら海上に出て大難に遭う。(龍の首の玉)→結局、明石の浦に漂着。

③うつほ物語

遣唐使俊蔭は途中で難破し、波斯国(ペルシア)へ漂着。23年後に帰国する。後に官職を辞して娘に秘琴と清原家の再興を託して死ぬ。

④源氏物語

瀬戸内海の須磨・明石

※玉鬘物語は九州から畿内まで。やはり瀬戸内海の範囲内(住吉明神・長谷観音の加護)。

⑤今昔物語集

インド・中国を含む、仏教受容世界が舞台(但し、インドへ行くわけではない)。

(2) 中世

⑥閑居の友(仏教説話)の巻頭説話

真如親王がインドへ向かい、東南アジアで客死する(9世紀の実話が基)。

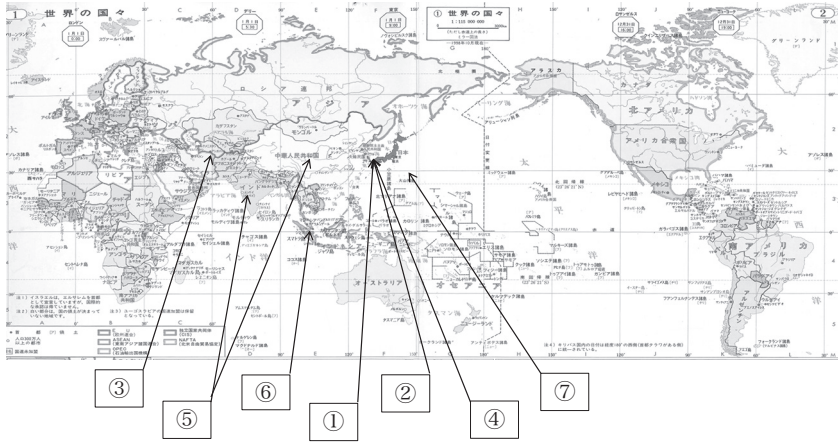
※真如親王=高丘親王(平城天皇皇子で皇太子となったが、810年、廃太子となる)。

(3) 近世

⑦西鶴『好色一代男』など

女人ばかりが住むユートピア(女護の島)へ船出。

これらのうち、注目されるのは⑥である。嵯峨天皇の皇太子・高丘親王が廃太子となり、出家して中国にわたり、さらに仏教の聖地・インドを目指したのは、9世紀初めのことである。だが、目的を果たせぬまま、途中、現在のシンガポール辺りで客死した。⑥は、この実話を基に説話化したものであるが、東南アジアを舞台にすること及び実話を基にする点に特色がある。



《世界地図・日本古典文学の範囲》

——ペルシア、インド、シンガポール、中国、朝鮮半島・国内——

- ①朝鮮半島、瀬戸内海・和歌山沖、②明石浦、③ペルシア（中東）、④須磨・明石、瀬戸内海、
⑤インド・中国・日本、⑥シンガポール（東南アジア）、⑦女護の島（伊豆の沖）

①は朝鮮半島への遠征とその帰路に皇子（後の応神天皇）が瀬戸内海を流浪する話。②は「海」へ漕ぎ出して行くものの、漂着したのは「明石の浦」であり、④の『源氏物語』もまた、玉鬘物語では筑紫（北九州）へ行くものの、主人公の源氏は「須磨・明石」止まりである¹⁾。

最も遠い国が出てくるのは、③波斯国（ペルシア）へ漂着するという話を持つ『うつほ物語』であるが、物語の主な舞台は日本であり、都である。平安時代中期に実際に波斯国（ペルシア）が知られていたわけではなく、書物による知識や推測であろうと思っていたが、最近、奈良時代に、ペルシア人が大和朝廷に仕えていたというニュースが飛び込んで来た。奈良文化財研究所所蔵の木簡を解読したところ、ペルシア人とみられる役人が仕えていたというのである。おそらく海外の情報などに詳しいからであろうとされるが²⁾、古代の人々は現代人が考える以上に国際的だった。だとすると、『うつほ物語』で俊蔭が漂流してペルシアに流れ着いたという話は、あながち空想のみに拠っているとは限らない。実際にペルシアに行くことはなくても、話に聞いたりペルシア伝来の物を見たりする機会はあったのであろう。

このように、③の『うつほ物語』や⑥『閑居の友』には、遠い異国が登場するものの、それらは非常に限定的で、「海」へ漕ぎ出すと言っても、おおかたは瀬戸内海や九州、あるいは朝鮮半島といった国内あるいはきわめて近い「海外」に限定されている。

⑦近世の『好色一代男』は想像上の島へ船出するのだが、これは後述するように「海の彼方」にある「常世の国」という理想郷のイメージに基づいている。

以上のように、日本古典文学においては「海へ漕ぎ出す」作品は少なく、あっても国内や近隣の「海外」が多い。

【II】『源氏物語』における「海」「海辺」「海外」——王権物語とのかかわり

光源氏の場合、海に向かって漕ぎ出すと言っても、都から「須磨・明石」に行くだけだが、この移動は物語にとって決定的な意味を持っていた。都で帝の寵姫と恋愛事件を起こした光源氏は、自ら須磨に退去して謹慎生活を送る。桐壺帝に最も愛され、常に都中の人々に絶賛される主人公が、「海辺」にさすらいの様子が数々の名文によって彩られている。中でも次の文章で始まる秋の海辺の風景は、掛詞などを駆使しているにもかかわらず、実際に波の音が聞こえて来るかのような臨場感を持つ。

須磨には、いとど心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の、関吹き越ゆると言ひけん浦波、夜々はげにいと近く聞こえて、またなくあはれなるものはかかる所の秋なりけり。

御前にいと人少なにて、うち休みわたれるに、独り目をさまして、枕をそばだてて四方の嵐を聞きたまふに、波ただここもとに立ちくる心地して、涙落つともおぼえぬに枕浮くばかりになりけり。琴をすこし掻き鳴らしたまへるが、我ながらいとすごう聞こゆれば、弾きさしたまひて、

恋ひわびてなく音にまがふ浦波は思ふかたより風や吹くらん

とうたひたまへるに人々おどろきて、めでたうおぼゆるに忍ばれで、あいなう起きみつ、鼻をしのびやかにかみわたす。 須磨巻② pp. 198-199

この条は、古来、しばしば絵画にも描かれてきた。源氏は「海（から）はすこし遠い」場所に住んでいるのだが、夜になると「浦波」がすぐ耳元まで押し

寄せてくる気がするような、わびしい場所で過ごさなければならない。そんな我が身のことを思うと、自然と涙があふれてくる。そして失意の源氏の身にも春がめぐって来た。親友の頭中将が須磨まで訪ねて来たのである。久しぶりの再会を喜びつつも、都へ帰って行く友を見送らねばならない寂しさが語られた後、翌三月の上巳の日に「禊ぎ」をすることになった源氏は、「海辺」へ出る。昨春の須磨への船旅以来、源氏にとっては初めての「海辺」である。「海づらもゆかしうて出でたまふ」とあるから、1年の間、「海辺」には全く出て行かなかったことがわかる。祓えをしてもらった源氏は、その「禊ぎ、祓え」のために、舟に「ことごとしき人形」を乗せて流すのを見て、災厄を負わされて流されていく「人形」は、まるで海辺にさすらう今の自分のようだと思うのであった。すると、その源氏を暴風雨・高潮・雷が次々と襲い、「命尽きなんとする」危機に見舞われる。『源氏物語』はここに、主人公が海浜をさすらう物語を置き、死の恐怖を味わせた上で、その危機から救われる姿を描くのであり、一種の「死と再生」の要素が盛り込まれている。

暴風雨の中で恐れ戦く源氏の夢に、何度も得体の知れないものが現れるので、源氏は海の神（住吉明神）に、和歌を詠んで祈りを捧げる。

・「海にます神のたすけにかからずは潮のやほあひにさすらへなまし」

(源氏の歌)

すると、今度は夢に故父桐壺院が現れて光源氏に、次のように告げる。

・「住吉神の導きたまふままに、はや舟出してこの浦を去りね」

(故桐壺院の言葉)

一夜明けて、暴風雨が収まると、まだ波の高い浜辺を一艘の舟がこちらへとやって来る。それは明石入道が住吉明神の夢のお告げに従って、舟を仕立てて源氏を迎えに来たのであった。即ち、源氏の夢に現れたのは「海の神」（住吉明神）であり、その神が明石入道という使いを出して救出に来たのである。聞けば、源氏も明石入道も同じ夢を見ていたことがわかる。光源氏は海の向こうからやって来た明石入道の舟に乗る。その再度の「舟出」は、須磨から明石へ行くだけで、きわめて近距離の移動にすぎないが、娘の明石君と結ばれて都に戻り、その子孫が皇后・天皇となって、実質的な権力者として成功するという

きわめて重要な意味を持つのである。光源氏は海浜に流離して明石入道の協力を得て都に帰り、大政治家となるわけで、この須磨流離は『源氏物語』にとって不可欠のものだった。須磨・明石という「海辺」への流離がなければ、源氏の成功はなかったわけで、都にはない「海」や「海辺」が重要な機能を果たしていることがわかる。

ちなみに明石君は「海龍王の后」（若紫巻）と称されていて、源氏が明石入道に導かれて明石に移るのは、「海」や「海辺」だけでなく、「海底」の王国のヒメと逢うことを意味していた。つまり『古事記』神話における「海幸・山幸」神話の下敷きになっているのである。神話では、山幸が海底の王国へ行き、トヨタマビメと結婚する。ふたりの間に生まれたのがウガヤフキアヘズで、その子がカムヤマトイハレヒコ（神武天皇）になるから、この「海幸・山幸神話」は天皇家の王権神話に外ならない。源氏は明石君と出会うことによって、明石姫君を授かり、この姫が国母となる。つまり源氏と明石君の血筋から天皇が誕生する点で、王権物語のバリエーションになっているのである。ここでは「海」の中の「海底」の王国神話を下敷きにしながら、源氏の政権奪取の物語を創造している。これは『古事記』神話において、「山幸」が「海辺」に出て狩猟をすることや、兄弟から借りた釣り針をなくすという過ちを犯す点とも一致する。「海」へ出ることは、『古事記』においても『源氏物語』においても、その基軸にかかわる展開に不可欠の要素なのであった。

【III】『古事記』——「海の彼方から訪れる神」がもたらす幸運

(1) 海の彼方から訪れる「こびと」の協力によって創造される日本

『古事記』には、「海」の彼方からやって来て国を助けたり、国に財宝をもたらしたりする話がある。（上巻・大国主神）

まず注目されるのは、「海」の彼方から来る神の協力なくしては、国作りをなし得なかったという話である。『古事記』の「出雲神話」には、「大国主の神」という、文字通り国作りをする神が登場するのだが、この神は、「スクナビコナ」という「こびと」の助けを借りるのである。

この「スクナビコナ」という「こびと」の神は、「常世の国」という理想郷

からやって来る。アイヌにも「コロボックル」という「こびと」信仰がある。コロボックルは、スクナビコナ伝説の原型か、あるいはその進化したものだと考えられている。

また「こびと」ではないが、沖縄・奄美群島では「ニライカナイ」という「海の彼方」に理想郷があると信じられているが、これは中国を中心とする東アジアの「蓬莱の島」のパターンのひとつだと考えられる。【I】で挙げた⑦「好色一代男」が船出する「女護の島」も古代以来の「常世の国」のイメージを受け継いだものであろう。

いずれにしても、日本列島とその周辺には海の彼方に理想郷があり、そこからやって来る「こびと」が国作りを助け、幸せを運ぶという発想があったことがわかる。

(2) 海の彼方から訪れる渡来人

上記(1)のような発想には、実際に日本列島を訪れてさまざまな文明や文化をもたらした渡来人のイメージがその基底にあると考えられる。たとえば、『古事記』の応神天皇の記事には「アメノヒボコ」の話がある。新羅の皇子アメノヒボコが宝物を携えて来て献上する話だが、ここには渡来人があらたな文化や技術を伝えた歴史的背景がある。(中巻・応神天皇)³⁾

中国や朝鮮半島から伝来して日本の国のありかたを大きく変えた仏教や律令制度といったさまざまな文物・技術は、4～7世紀以来、受容されて日本を形作ってきた。

海の彼方から新たな文物をもたらした渡来人のイメージは、中世以降になると、たとえば「七福神」といった庶民に愛される、まさしく「福の神」のイメージを生んだ。「七福神」は「宝船」に乗っているが、それは海の向こうから訪れて宝をもたらすのであり、いわば「アメノヒボコ」の中世・近世版なのである⁴⁾。

(3) 海底の楽園という発想

日本古代には「海の彼方から訪れる神」の外に、「海底の楽園」からもたらされるものという発想もあり、「海の彼方」の理想郷のバリエーションと考えられる。

その代表的な神話として『古事記』の海幸・山幸の話がある。そこでは海から迎えが来て、主人公は海神の国（竜宮城）へ行く。そして海底の宮殿で美しいヒメと過ごして地上に戻って来るのだが、ここで重要なのは、海神の国のヒメとの結婚によって、天皇家の先祖が生まれるということである。海の底に招かれ、そのヒメと結ばれることが国を支配する天皇家の起源神話になっている。これは海の彼方の神と協力して国作りをする大国主神とよく似た発想の話だといえよう。

このように「国作り」も「天皇家」の祖先も海から訪れるものの助力あるいは結合によって実現するのである。

この話は、『源氏物語』「須磨・明石」巻で須磨に迎えに来る明石入道の話を行きとさせ、入道はもちろん「こびと」ではないが、源氏にとっては「海」の向こうから自分の許にやって来て、源氏の成功を支える人物である。しかも皇太子妃となった明石姫君に皇子が生まれた時、山深く姿を消す点も、目的が成就すると、そこから姿を消すという点で「スクナビコナ」の話の型をふまえていることが知られる。石山寺に残る『源氏物語画帖』（四百画面）の絵には、須磨に源氏を迎えに来た舟と、それに乗って明石に着いた時の様子を描いている。その二枚の絵には、次のような説明が付されている。

(明石) 二 うみはたに小ふねよせて源ノやとりへ二三人参てい也

(明石) 三 源明石にてふねよりおり車にのり給ふを入道おかみ申てい也

前者は須磨の「海辺」に入道からの迎えの舟が到着して、源氏を迎えに行く場面であり、後者はその舟に乗って明石浦に着き、それを入道が浜辺に跪いて迎える図になっている。

なお、神話の応神天皇の瀬戸内海流離の条では、明石は特別な意味を担っている。異母兄たちが「赤石」（明石）で待ち伏せして、皇子（応神）の都入りを阻止しようとするのだが、これを打ち負かすのである。『源氏物語』では、逆に異母兄（朱雀帝）との力関係によって流離するわけだが、そこから明石に移ると、そこには明石入道という源氏の縁者で助力者がいて、源氏の栄華を築いていく転換点になっている。その点でも応神天皇神話における明石と同様の意義を持っている。神話と『源氏物語』とは王権物語である点でも共通してい

るのである。

【IV】 大航海時代の幸若舞『百合若大臣』は『ユリシーズ』の翻案か？

——近代における「南蛮幻想」の一事例として

大航海時代に流行した芸能・幸若舞の名作とされる『百合若大臣』は、ポルトガル宣教師によって伝えられたホメロスの『ユリシーズ』（オデュッセイア）の影響を受けて成立したという説がある。

大航海時代は、能と共に幸若舞が武家の式楽として流行していた。信長・秀吉・家康の時代であるが、ちなみに信長が自害する時に謳ったとされる「人間五十年……」の詩句は、幸若舞『敦盛』の一節とされる。

1906（明治39）年に、坪内逍遙は幸若舞『百合若大臣』はポルトガルの宣教師たちが伝えた話が基になったという説を唱えて、現代まで受け継がれてきた。ただし幸若舞『百合若大臣』は、1551年に京都での上演記録（『言継卿記』）が見つかったために、現在、ポルトガル伝来説は通説とはされていないのだが、幸若舞『百合若大臣』のあらすじは以下の通りで、確かにギリシアの『ユリシーズ』のストーリーとよく似ている。

そのあらすじは「弓に長けた勇武の若者百合若は貴種として生まれ、勅命によりムグリ（蒙古）の大軍征伐を成し遂げるが、部下に裏切られて孤島に置き去りにされる。だが百合若は壱岐の舟で帰還して復讐を果たし大臣となる。」というものである。

それゆえ坪内逍遙は、ポルトガル宣教師たちが伝えた話が基になって、幸若舞『百合若大臣』が成立したとする説を唱えたのだが、現代では日本国内（壱岐）の「百合若説経」が母胎となったとする説が有力である。だが、ポルトガル伝来説は、近代以降、多くの研究者の間で支持されてきたことも事実である。

井上章一は、近代以降の南蛮伝来説は「南蛮幻想」に外ならないと述べている。「南蛮幻想」とは「信長と古代ギリシアの邂逅」であり日本人の心を呪縛する、異文化への隠された「夢」なのであって、現代の民族学等の成果を勘案すれば、ユーラシア大陸全体に前史時代に広まった説話のひとつとする⁵⁾。

坪内逍遙、新村出などの日本を代表する知識人・研究者がポルトガル伝來說を支持してきたのは、ポルトガルが日本の文化の創造に深く関与したことを強く意識していたからであろう。近代になって鎖国が解かれ、海外との交流が盛まったことが契機となって、井上の言う「南蛮幻想」があらためて想起された可能性は十分にある。

井上によれば、新村出はポルトガルの詩人・カモンエスが16世紀半ば以降、マカオで暮らしたこと、彼を通じてユリシーズ伝説が伝わったと空想したこともあるほど、「南蛮幻想」を強く抱いていた。

いずれにしても大航海時代における「南蛮」は日本人が初めて出会ったヨーロッパ世界であった。

日本人は、ポルトガルやスペインなどの南蛮からもたらされたさまざまな文化を近代になってもよく記憶し伝えていた。それは単なる文化の記憶にとどまらなかった。その最たるものがキリスト教であり、300年近くに及ぶ禁教令と迫害にもかかわらず、近代まで「隠れキリシタン」が信仰を守り続けてきたことは驚嘆に値する。そのような「南蛮」に対する記憶が、近代になつてあらためて呼び覚まされ、『百合若大臣』＝『ユリシーズ』伝來說があらわれたのであろう。

いずれにしても『百合若大臣』は、戦に出て漂流する点で海にこぎ出す文学のひとつだと考えてよい。明治時代（近代）に、海外との交流が盛んになった時、『百合若大臣』のポルトガル伝來說が現れるのは、前述のように海の向こうから来て国作りを助けたり、魅力的な文化や財宝がもたらされるという、古代神話以来の日本人の心性が、その基盤にあったからだと考えられる。

特に中国や朝鮮半島から伝来して日本の国のありかたを大きく変えた仏教や律令制度といったさまざまな文物・技術は、1300年以上も前から受容されて日本を形作ってきた。つまり約450年前のポルトガル・スペインによる「南蛮文化」は、いわば第二第三の渡来人文化だったのである⁶⁾。

【V】 再び、『源氏物語』へ——「海外」から訪れる人物のもたらすもの

「海」の描写は、「須磨・明石」巻を除くと、外には玉鬘十帖に見える程度だが、実は、『源氏物語』において、きわめて重要な条で「海外」から来た人物が源氏の未来を決定づける場面がある。それは桐壺帝が美貌と才能を兼ね備えた源氏（ここでは、まだ「若宮」）を将来どのようにすればよいか考えあぐねて高麗（当時の朝鮮半島の国）の相人に観相させるのである。その時、若宮を見た相人は、驚いて何度も首をかしげて次のように言う。

国の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人の、そなたにて見れば、乱れ憂ふることやあらむ。朝廷のかためとなりて、天の下を輔くる方にて見れば、またその相違ふべし

桐壺巻39～40頁

（国の親となって帝王という最高の位にのぼるはずの相のおありになる方であるが、さてそういう方として見ると、世が乱れ民の苦しむことがあるあるでしょう。ただ朝廷の大臣などの位に就いて天下の政治を輔佐するという方として判断すると、またその相が合わないようです）

つまり、高麗の相人は、「若宮」は臣下として終わる相ではなくやはり帝王となる相を持っていることを予言したのであった。そして、この高麗の相人の言葉によって桐壺帝は、「若宮」を臣下にして「源氏」姓を与えることを決心したのである。

こうして「海外」から来た高麗の相人によって「源氏」を主人公とする物語が始まった。しかもこの高麗の相人の予言は、その後の『源氏物語』の展開そのものも規定していく。即ち、『源氏物語』という壮大な光源氏の物語は、「海外」から来た人物の言葉によって重大な決定がなされ、同じ人物の予言によって主人公の未来が決まっていく。臣下でもなく天皇でもないとする予言は、ずっと後に、源氏が准太上天皇になるところまでルールを敷いたのである。物語上の重要な構想を据え付け、支えているのが、「海外」から来た「高麗の相人」なのである。

天皇制から排除された天皇の子が再度、天皇制の内側に入り込んでいく物語の路線を決定的にするのは、「海外」から来た人物なのであった。

【むすび】「海」「海辺」「海外」の文学的文化史的特色

日本古典文学における「海」や「海外」に関しては、海へ漕ぎ出していく例もないわけではないが、特色としては、むしろ主人公を助ける人が海の向こうから来てくれるというパターンが顕著である。それらは国作りであったり、王権神話のバリエーションであったりする。特に『源氏物語』の「須磨・明石」巻には、神功・応神神話はもちろんだが、これに加えて大国主神を助けたスクナビコナによる国作りの神話の発想が生きている。古来の日本列島とその周辺に伝わる海の向こうの神と理想郷の伝承が『源氏物語』の中にも確かな形で残っている。とりわけ「高麗の相人」は、源氏の未来を決定するほどの存在である。光源氏が権力を奪い実質的に天皇制の内側に戻るという展開は、海の向こうから訪れた人物の予言によって保証されるのである。しかも源氏は、「須磨・明石」という「海辺」に行ったからこそ、暴風雨によって再生し、新生し、さらに天皇制を永続させるための明石姫君を得ることができた。「海外」から来た外国人の予言は、「須磨・明石」という「海辺」にさすらうことによって実現可能なものになっていく。

海の向こうから、訪れる神や人が幸いをもたらすという発想は、古代神話以来、形を変えながらも古典文学の中で生き続け、現代でも「宝船」や「七福神」のイメージが一般的に受け入れられているのは、このような遠い時代からの日本文学・日本文化の発想が生き続けていることの証左であろう。

注

- 1) 玉鬘は九州から逃れて瀬戸内海を通って行くが、ここでは割愛する。
- 2) 2016年10月5日、奈良文化財研究所の発表による。筆者はこれをブラジル・サンパウロで知った(ニッケイ新聞、10月7日付)。
- 3) 『日本書紀』では、任那と新羅の抗争にかかわる垂仁天皇の記事の中にあり、新羅の皇子アメノヒボコは七種類の宝を持参したと記されている。
- 4) 「七福神」信仰は、エビス信仰を併せ考える必要があるが、今回は特にふれない。
- 5) 井上章一『南蛮幻想——ユリシイズ伝説と安土城』文藝春秋、1998年

なお井上は本書において、金閼丈夫が『百合若大臣』譚の原像を応神記の武内宿禰の海上流浪などに求めたことにふれている。

- 6) ただし、無人島に漂着する英雄の話は世界中に分布しており、『百合若大臣』は日本版英雄漂流物語（貴種流離譚）だという点も忘れてはならない。

付記

『源氏物語』本文は、小学館・新編日本古典文学全集による。なお、本稿は、2016年9月22日に、次のタイトルで招待講演した内容を改稿したものである。

「日本古典文学における貴種流離譚について—須磨・明石巻を「海」やポルトガルを含む「海外」とのかかわりから探る—」

於アマゾナス連邦大学（ブラジル・マナウス市）。

第24回全伯日本語・日本文学・日本文化・教師学会と第11回ブラジル日本研究国際学会の共催による。

The Essential of the Essay, The Sea, the Seaside and the Overseas of Japanese Classical Literature: “Kojiki”, “The Tale of Genji” and before or after the Works of “The Age of Discovery”

Rei Kufukihara

Japanese classical literature had the deep-rooted idea that someone visited Japan from overseas to bring the treasure and help creation of the land. For example, in the case of *The Tale of Genji*, this hero: Hikaru Genji is restrained in his behavior at the seaside of Suma distant place Miyako, someone comes to help him after the storm over the sea. Someone is Akashi Nyudo, so Genji married to Nyudo's daughter to become happy. Because Genji could come back to Miyako to get enormous power for governing the country. The story which someone brings fortune over the sea had been narrated in Japanese myth: “Kojiki”. Actually Korean in ancient times has come often Japan to bring many superior techniques to help making Japan. Such a fact has been reflected the myth of “Kojiki”. In addition to, *The Tale of Genji* has Korean fortune-teller whose divination has decided Hikaru Genji's future. That means the future of *The Tale of Genji*. The foreigners have influence for Japanese myth, tales and history. By the way, Kōwakamai “Yuriwaka Daijin” coming into 16 century what is called “The Age of Discovery” was influenced by “Odyssey”. This theory was insisted by Shōyō Tsubouchi in 19 century. He holds his opinion that the missionaries in 16 century informed the story “Odyssey” and “Yuriwaka Daijin” was made. This theory is the same kind of the idea that someone should bring something splendid over the sea since ancient days.